

報道頻度はまさに過去に例を見ないほど増加している。

これ等常態を逸した現象を引き起こす最大原因は温室効果ガスによる地球温暖化であることは現在広く認められてきている。

16年前京都議定書が成立。人間の炭素活動に対する初めての国際制約。しかし二酸化炭素の一位と二位の排出国が不参加。現在、ヨーロッパ各国は目標を達成しつつあるが、日本は削減どころか8%余りの超過状態、目標達成など程遠い。

今、世界人口は71億人、地球の扶養能力をはるかに超えている。この人口が文化的生活を送るのだから地球環境は変わらざるをえない。石油の埋蔵量はもう限界に来ているとの見方もあるが、まだまだ掘削されており、天然ガスも石炭もそして新たにシエールガス、メタンハイドレード、さらには木材も、これからも貯蔵炭素の二酸化炭素化は続く。

地球温暖化によって大きく変わりつつある気象。これからはこの気象に対応した町、国、社会づくりが必要だ。

大気中の二酸化炭素を削減する方法として、①ガスを固体化して格納する、②ガスを他の物質に取り込む。この

二つの方法があるが、①については貯蔵場所や経費の問題があり、おそらく地球規模的な同意は得られないだろう。②については植物が同化作用として成んなく行い、人間をはじめほとんどの生物はこの産物の恩恵により生命の維持、進化を果たしてきた。そして今浪費している有機物

全ては過去において植物が生成した同化産物に由来するのである。また、重炭酸ナトリウムや炭酸カルシウムなど無機物として取り込む方法があり、工業的に生産されているほか海洋でも吸着されている。しかしここで二酸化炭素の固定量は排出量に遥か及ばない。

二年前心躍る報道があった。豊田中央研究所の成果として人工光合成に成功したというのだ。そして昨年、パナソニックが植物並みの合成能力を実現したと発表した。しかも生成物はメタンや複数の有機物であるとのことだ。若き頃、人工光合成を夢見たことがあったが、それが今、現実化しているのだ。今世界がこの研究にしのぎを削っている中でも30年の歴史を持つ日本が先頭に立っている。

光合成を人間が行うことの意義は、植物・命を介さずに有機物を合成し、その産物を人間の生活循環の中に組み込むことにある。多様な物質をいかに能率的に合成し、合成物を再加工して目的物を得る技術開発は緒についたばかりだが、最大第一の大峠は越えつつある。

を人間の生活循環の中に組み込むことにある。多様な物質をいかに能率的に合成し、合成物を再加工して目的物を得る技術開発は緒についたばかりだが、最大第一の大峠は越えつつある。



「輝かしい歴史の重量拳部のこと」

旭川市在住

芝山 一雄

(昭和42年農学科卒
昭和43年農学専攻科修了)

若い会員の皆様には聞き慣れない学友会の部活だと思ふ。この機会にぜひ知っていただきたく投稿した次第です。それは現役部員が居なくなり廃部となったが、意気盛んなOB会として存続しているからである。

部発足の歴史を顧みると、終戦後まだ10年も経っていない昭和29年、旧制山形高の気

風が随所に残っていた時代に文理学部で旗揚げされた。福島県出身で高校時代に選手として活躍していたS30年

文理学部卒故佐藤如男さんと故田中多喜男さんが国立大学では全国で唯一を旗印に、私大の早稲田、慶応、法政、明治などの強豪校に並んで、其の一員として日本学生重量拳連盟を設立したのだ。

(この時期から慶応大との定期戦を交互開催で実施していた。)今は全国で数十大学が加盟し、1部から3部まで構成された大所帯の学生連盟になっている。その中で、発足当時から開催されている全日本大学対抗戦がある。当時はそうそうたる私大のオリンピックの選手に混ざって、我が山形の選手が出場していたのである。

文理学部ができた翌年には、我が農学部にも一般教養を終え専門課程に進んだS29年農学科卒仙石寿さんが中心になり部ができた。また、同時期に工学部にも部ができた。

学内では毎年、小白川キャンパスで開かれるスポーツ大会(学部対抗戦)で農学部の存在感をみせていた。農学部伝統のスポーツクラブであった。私の在学中は3年連続して工学部、理学部に勝利し

て農学部長から記念の副賞をいただいたりしたことを思い出す。

また、毎年開催された農学部大運動会(収穫祭)には学友会の部がデモンストレーションをやり、重量拳部は60キロのバーベルを担いで徒競争のリレーをしたり、今思うと元気な時であった。余談になるが、当時、後期授業前の10日ほどの休みに市内の米穀倉庫で働く、米かつぎ(運搬作業)のアルバイトが学部生の大きな資金源だった。我が部員は体力があり非常に重宝がられ、翌年の約束までされたものだ。

山形県内の大会でも活躍し、県の代表選手として国民体育大会に多くの選手を送り天皇杯得点の要員として山大の名を馳せていた。(加茂水族館長の村上龍男さん(S38卒)も国体代表選手だった)また、熱心なOBが大学卒業後は就職先の企業(トヨタ自動車、日立製作所など)に部を創設したり、各地の協会で競技の普及、指導をしている。

このように青春の熱き思いの抱いた重量拳部だったが、平成10年頃を境に3学部ともに現役の部員が居なくなりついには廃部となった。農学部と工学部は部室が廃棄されたが、小白川のキャンパスに

は運動部のトレーニング室として今も練習場が残っているようである。

現在は組織化された山重量挙げOB会として、3学部約70名のOBが加入し情報交換を目的に会報を毎年発行し、数年ごとに総会を開いて親睦を深めている。もちろん、将来の現役部員復活を夢見ての活動である。

最後になりましたが、OB会名簿の不備から多くの方々を欠落していると思う。若き日にバーベルを挙げ、共に汗を流した方、また懐かしいと思われる方は、ぜひ左記にご連絡をいただきたい。

(山形大学重量挙げOB会会長)
〒078-8261 旭川市東旭川南1条8丁目2-12 小生宛
TEL 0166-6136-12011
メールアドレス
k.shibay@fancy.ocn.ne.jp

昭和四十五年卒 同期会 北海道で開催

札幌市在住

増子 誠

(昭和45年農業工学科卒)

昭和45年卒業の学部全科合同同期会を、北海道函

館市で開催したので、報告します。

前回の開催(平成22年、由良温泉、鶴窓会だより第17号に報告済)で、次は北海道でやろうということにはなっていました。地元北海道在住者は、16人も居るのに私を含めて忘れ者ばかり、鶴窓会の副会長でもある齋藤博行さんから開催の世話人を要請されていたにもかかわらず、何もしないでいたところ、齋藤さんが日時・場所を決定され、案内状まで送付してくださり、開催の運びとなりました。

北海道在住者として全く申し訳なく思っており、齋藤さんに、唯々感謝するばかりです。

さて、開催場所である函館市湯の川温泉のホテルで、7月6日(土)から一泊で行われました。

「やあ、久しぶり！」や、「あんた、どなただったっけ？」等々の会話で集合が始まり、農科10人、農工6人、農化6人で、林科が1人と多少寂しくは感じましたが、合計23人の出席となりました。

その中で地元北海道在住者の出席も4人と少なく、申し訳ない気がしております。いよいよ懇親会に入ります。

全員の集合写真撮影の後、一人ずつ近況の報告です。我々の年代は、年金が満度にならぬまま居る人も居ます。まだ勤めている人も居ますが、ほとんどが家庭菜園や旅行、登山、孫の世話など、悠々自適の生活を送っているようです。まだまだ元気で、「これからの同期会にも必ず出席するぞ！」と宣言した人もおりました。

逆に、相応の年代の為、身

体に不調があり、参加できない人も居り、残念なこともありました。

しかし、今回は身体が多少不調でも、夫人を伴い、いや夫人に伴われ参加した人が二人いました。この様な参加は微笑ましく、また我々に勇気を与えていただき、「これも有りだな。」と思わせてもらい、これからの参考にさせていただきますました。

懇親会は盛り上がり、逍

遥歌を斉唱の上、次回の再会を誓ってのお開きの後も、当然、部屋に集まって昔話、近況など、遅くまで懇親を図ったのは云うまでもありません。

次の日は各自それぞれの予定に基づき、函館山や五稜郭などの市内観光、恵山、大沼公園、札幌などまで足を延ばすなど、北海道を楽しんで、帰路につかれたと思います。

鶴岡の地で、学び舎を共にし、強い絆で結ばれた仲間、これからの機会を作って、出来る限り長く付き合っていきたいものと思っております。その為にも体調に留意しながら、無理せず、頑張っていきたいと思います。



淡泊だった理由

仙台市在住

菅野 春雄

(昭和47年農業工学科卒)

自分の書いた本の内容がそのまま映画や舞台になるのはかなり難しいことらしい。今、マスコミを賑わせている濱田朝美著「日本一へたな歌手」の舞台化では、台本が原作と異なっているという著者の訴えに共感した主演女優が出演をпойコットし、とうとう裁判沙汰になってしまった。一年ほど前にも、辻村深月の小説「ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。」のテレビドラマ化が撮影直前になつて中止となる事件があった。この場合も原作を改変した脚本に著者が納得しなかったためである。純文学は自分のために書き大衆文学は他人のために書くといわれるが、いずれにしてもそれが自分の精魂を傾けたものであるほど原作を尊重し

て欲しいと願うのは当然のことだろう。

ところが、原作の改変を鷹揚に受け入れた作家が過去にあった。それは川端康成である。大正15年に発表された小説「伊豆の踊子」は昭和8年に映画化されているが、彼によればその内容は原作を非常に離れていたという。そうなったのはどのように原作を改変してもかまわないと自ら制作者に伝えたからだというのだ。そこには文学と映画は所詮別物という明快な割り切りが根底にある。現今の「風立ちぬ」に至るまで、文芸作品といわれる映画や演劇がごとく原作から大きく離れていることを思えば、彼の考えは至極妥当なものと思われるのだが、当時におけるそこまでの達観はやや出来過ぎな気もする。

渾身の力を込めて世に問うた(はずの)自分の作品に對するこの淡白で投げやりとも思える態度は一体どこから来るのであろうか。それこそがこの小説を読み解くカギになるものと思はれている。彼にとつてこの小説とは何だったのか、詳しくは拙著「誰も知らなかった『伊豆の踊子』の深層」(静岡新聞社)を是非お読みいただきたい。
※裏表紙に「著書の紹介」あります。

昭和48年卒 農学科の会開催

酒田市在住

阿部 重彰

(昭和48年農学科卒)

平成14年以來の農学科同期会を、10月26日に開催しました。教養部の、当時は一年半を過ごした山形市の、学生時代は、とてもあがれなかった創業140年という老舗料亭千歳館で、山形の舞子さん5人の出迎えを受けました。定年後同じ職場に残った人、同じ職種別の職場に移った人、自宅で農業に戻った人、四国巡礼を始めた人、海や川や山で山菜採り、釣り三昧の人、北海道で5釣ものタマネ



上段右端が筆者

ギを作っている人、東根で定年後日本一のサクラノボを作っている人、震災で両親と奥さんが流され奇跡的に奥さんが助けられた話には涙しました。

北海道のばんえい競馬が好きな人、ゴルフでは足りずフィットネスに通い始めた人。また農業改良普及員を退職後、73歳の敷地を持つという、札幌市の農業体験交流施設「さとらんど」につとめている奥山誠さんからは、「市民農園2000カ所、農業講座のべ2000回と、市民は農業にものすごい親しみを持っています。同窓生の皆さんも是非おいでください」との伝言でした。10名の参加があり、それぞれ卒業後の人生の実体

験を聞くことができました。今回は来年6月、北海道の定山溪で開催することに勢いで決まりましたが……。幹事の渡邊茂敏さんごくろうさまでした。



近況そして： 思い：今昔

株式会社 渡辺採種場

仙台市在住

福島 洋

(昭和49年園芸学科卒)

今年の6月1日から2日にかけて、気の合った同窓の間と鶴岡に集まりました。宿泊は近代的なホテルでなく、懐かしい匂いのする旅館山王荘に泊まりました。夕飯までの間、40年前の記憶を蘇らせながら鶴岡銀座、内川、NHK、そして山形大学農学部を散策しました。街並み、大学は大きく変わっており、土曜日の午後というの

に人はあまり歩いておらず店にはシャッターも目立ちました。残念なのは、今もそうですが酒も強くなく、金もなかったので飲み歩いたという記憶もうすく、当時の屋台の焼鳥屋の話題にはついていけなかったことでした。

宿に戻った時はのどが渴き、それぞれウーロン茶、ノンアルコールビール、ビールを飲みながら乾杯し談笑しました。その後、旬のタケノコ料理を堪能しながら、学生時代の思い出話や現在の近況を話し合いながら楽しい一晚を過ごしました。次の日は行こうと思ってもいけなかった庄内映画村を見学しましたが、思った以上に山奥にあつたのには驚きました。徒歩で映画のセットを巡り歩き、日頃の忙しさを忘れさせてくれた一時でした。別れを惜しみながら庄内映画村で解散した後、鶴岡に骨を埋めるという覚悟で鶴岡に家建てた息子の家を訪問しました。息子は私と同じく山形大学農学部を卒業し、鶴岡で農業をやりたいということで農業法人に就職し、稲作と「だだちゃ豆」の栽培をしております。私の「うれしさ」というのは色々ありますが、その中で一番というほど「うれしい」ことは息子が鶴岡で農

業をしていることです。実を言えば私も長男でなかったら鶴岡に残り農業をしたいという思いが強くありました。その思いを一言も息子達に言わないのに息子がやってくれていることに感謝の思いです。(息子は次男です)

最後に私の仕事の話をしますと、私の勤めている株式会社渡辺採種場は宮城県美里町に本社があり野菜の「育種」「採種」「販売」を行っている創業91年の会社です。会社は松島白菜で名声を得、白菜、甘藍、大根、南瓜、葱、玉葱、茄子、トマトなど野菜の種子を育種し採種し販売をしております。

その中で私は美里町、仙台、青森、北海道の地域で主に営業の仕事をしていました。現在は本社で仕入・管理の仕事をしております。住まいは仙台ですので1時間20分かけて毎朝本社のある美里町(旧小牛田町)まで車で通勤しております。

あと2年余りで定年ですので最後の仕事として何をすれば役に立てるだろうと考える今日この頃です。定年後はどうするか、はつきりと決まっていますが園芸、農業に関わってほしいと思っています。この頃はTPPや天候異変など日本農業をとりま

く情勢は厳しくなってきましたので、日本の食料自給率を高め、安全・安心な栄養価のある農産物を消費者に届けられるような取り組みができれば幸いだと思います。末筆ながら、山形大学、鶴窓会の発展と会員の皆様のご活躍とご健勝をお祈り致します。



仙台湾潮除 須賀松林の始まりと 再生に向けて

宮城県緑化推進委員会

河野 裕

(昭和50年林学科卒)

本稿は、本年6月に開催された鶴窓会宮城県支部総会において発表させていただきました仙台湾の海岸林のお話の一部を再構成したものです。

私はこの3月に宮城県庁を定年退職となりました。

役所生活終盤の10年間、宮城県は三度の大きな地震に見舞われました。平成15年宮城北部連続地震、平成20年岩手・宮城内陸地震、そして平成23年東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)。災害が比較的少ないとされてきた宮城県においてこのような短期間に大災害が連続するとは誰もが思いませんでした。なかでも東日本大震災は私たちが経験したことのない大津波を伴い、沿岸部を中心に甚大な被害が発生し、江戸時代から営々と築かれてきた海岸の松林も、津波に対する一定の減衰効果を果たしつつも壊滅的な被害を被りました。

この海岸防災林の再生に向けては、学識経験者、関係機関などによる検討が行われ、私もこれに参画する機会を得ました。この中で、仙台湾岸の海岸林は自然にできた森ではなく、「多くの人々が長い年月をかけて造り上げた森」という視点から考えていくことが重要としました。

それでは仙台湾の海岸林の始まりはどうだったのでしょうか。

時は慶長5年(西暦1600年)、仙台湾藩祖伊達政宗公は岩出山城にあって翌

年に控えた仙台湾開府のプランを練っておりました。その中で、仙台湾岸のヨシやマコモが生えている田谷地と呼ばれる広大な湿地帯に目をつけて、これを水田にしようと考え、排水路ともなる貞山堀の開削などにより干拓を計画しました。政宗公は海岸に近い田谷地は干拓しただけで米が穫れるというのではなく、海から吹きつける潮風や強風を防ぐ防潮林が必要で、しかも防潮林として大きく伸びる樹木はクロマツ以外ないことも知っていました。

その年の暮れ、政宗公は現在の石巻市から山元町まで延長約65kmの砂浜海岸に潮除須賀松林を造成するよう和田因幡為頼(近江の国出身。政宗公がスカウト。後の仙台湾初代山林奉行)に命じました。為頼は早速、遠州浜松からクロマツの種子を取り寄せて苗畑を造り、数年後、現在の七ヶ浜町などから植林を開始しました。これが仙台湾の海岸林の始まりであります。

以後、時代の幾多の変遷を経て、多くの人々の手により1000年を越える海岸林が造り守られてきました。

今、スタートした平成の潮除須賀松林造成においても、

地元をはじめ全国の皆様から多くのお力添えをいただきながら進めているところで、これからもご支援よろしくお願いたします。



ワインのある村で 地域を元気に

農学部企画広報室コーディネーター

赤松 博美(旧姓小山)

(昭和51年農芸化学科卒
昭和53年農学研究科修了)

還暦なんて遙か遠い先の他人事と思っていた。突然、還暦を祝う中学の同窓会を二泊二日で行うから出席するようにとの案内が舞い込んだ。とたん、そうか!!そう云えば私も今年度でそんな年になるんだっけ...と何故か妙に身の引き締まった思いを一瞬持ったものである。これを機に、ただただワイン事業に走り続けてきた三十数年間をそろりそろりと振り返ってみる。